

令和7年度 助成事業報告

Annual Report 2025

令和7年度助成事業報告の刊行にあたって

公益財団法人 オリンパス医学振興財団は、内視鏡医学に関する研究及び教育を奨励助成し、もって医学振興への貢献と人類の福祉向上に寄与することを目的として活動しております。

当財団は、昭和57年の設立以来、内視鏡医学の発展を支える研究助成機関として、研究者の皆様による挑戦的かつ先駆的な研究を支援してまいりました。

現代において内視鏡医学は、消化管領域にとどまらず、呼吸器、泌尿器、耳鼻咽喉科、産婦人科、整形外科、脳神経外科など、多岐にわたる分野において、診断・治療・手術の各場面で不可欠な医療技術となっております。

こうした中、当財団では、研究助成を中心として、国際学会に挑戦する若手研究医に対する助成、海外で研究活動をする研究医に対する助成、研究会の振興に対する助成、海外研究医の受入に対する助成、ならびに顕彰事業を実施し、内視鏡医学の研究推進、成果発信、普及および発展に努めております。

本報告書は、令和7年度に実施した各助成事業等の成果をとりまとめたものです。

研究助成および多施設共同研究助成につきましては、件数が多く、これまでの成果も含めて継続的にデータベース化して公開していることから、本冊子では概要のみを示し、詳細は当財団ホームページ掲載の成果報告データベースをご案内しております。これに対し、海外派遣助成、海外短期留学助成、研究会助成、海外研究医受入助成および顕彰については、本冊子において成果の概要を掲載いたしました。

本冊子を通じて、当財団の助成事業が研究者の活動をどのように支え、内視鏡医学の発展にどのように寄与しているかをご理解いただく一助となれば幸いに存じます。

令和7年度 助成実績概要

当財団は、内視鏡医学に関する研究及び教育を奨励助成し、もって医学振興への貢献と人類の福祉向上に寄与することを目的に、定款第4条に基づき、内視鏡医学に関する研究助成、海外短期留学助成、海外派遣助成、海外研究医受入助成、顕彰、研究会助成の事業を実施しております。令和7年度の助成実績は以下のとおりです。

顕彰： 4件
研究助成： 42件
多施設共同研究助成：7件（新規2件・継続5件）
内視鏡医学研究医海外短期留学助成：2件
内視鏡医学研究医海外派遣助成：16件
海外研究医受入助成：12件
研究会助成： 8件

総件数 : 91件 **助成総額** : 43,800千円

研究成果報告 目次

1.	研究助成・多施設共同研究助成について	・・・	P. 1	～	P. 5
2.	内視鏡医学研究医海外派遣助成	・・・	P. 6	～	P. 23
3.	内視鏡医学研究医海外短期留学助成	・・・	P. 24	～	P. 26
4.	海外研究医受入助成	・・・	P. 27	～	P. 37
5.	研究会助成	・・・	P. 38	～	P. 43
6.	顕彰	・・・	P. 44	～	P. 48

※ 助成事業名称・ページ数をクリックすると該当ページが表示されます。

本報告書では、令和7年度に実施した各助成事業のうち、海外派遣助成、海外短期留学助成、研究会助成、海外研究医受入助成および顕彰について成果を掲載しております。研究助成および多施設共同研究助成については、別途成果報告データベースをご参照ください。

成果報告データベース <https://pac.jfc.or.jp/endo-jfe/search.php?zid=f-00305>

研究助成 A 2件

五十音順・敬称略

主任研究者	施設名・所属科	役職	研究テーマ
大塚 崇	東京慈恵会医科大学 呼吸器外科	教授	極細径ファイバースコープによる難治性気胸の治療法の開発
蓑田 洋介	九州大学 病態制御内科学	助教	FDの病態評価を可能とする内視鏡検査法の開発：胃内圧と粘膜バリア機能の統合解析

研究助成 B 40件

五十音順・敬称略

主任研究者	施設名・所属科	役職	研究テーマ
合川 公康	埼玉医科大学 国際医療センター 消化器病センター	教授	バイオミメティクス技術を用いた防汚機能付加胆管ステントの開発
石川 裕美子	日本医科大学千葉北総病院 消化器内科	助教 医員	内視鏡的手縫い縫合法を用いた内視鏡的スリーブ状胃形成術の開発
上野 晃子	高知医療センター 産婦人科	婦人 科長	腹腔鏡下子宮筋腫核出術における ICG 静注による Myoma Pseudo Capsule (MPC) 温存術式の有用性の検討
大谷 正侑	国立がん研究センター 東病院 呼吸器外科	がん専門 修練医	内視鏡手術映像を用いた多面的熟練度評価人工知能モデルの構築
大橋 真也	京都大学医学部附属病院 先制医療・ 生活習慣病研究センター	特定 准教授	消化器内視鏡検診 NBI 観察時に見られる食道微小 brownish area (褐色域) 病変を有する健常受診者の疫学・遺伝子解析研究
堅田 親利	京都大学 がん免疫 PDT 研究講座	特定 准教授	食道癌患者に対する光線力学的療法 (PDT: photodynamic therapy) に関する全国登録調査
門田 智裕	国立がん研究センター 東病院 消化管内視鏡科	医長	臨床病期 IB/II/III 食道癌に対する術前治療効果の内視鏡的評価と予後との関連の検討
川見 明央	筑波大学小児外科	医員	臨床実用を目指した極細径内視鏡の開発
衣笠 秀明	岡山大学学術研究院 医療開発領域 消化器内科	助教	人工知能ディープラーニングによるヴァーチャル色素内視鏡画像変換技術開発
黄瀬 大輔	滋賀医科大学 内科学講座呼吸器内科	講師	重症 COPD に対する気管支内視鏡的治療の新たな意義：肺過膨張改善による全身状態の変化に関する前向き研究
木村 英憲	滋賀医科大学 医学部附属病院 光学医療診療部	講師	胃腫瘍に対するゲル浸漬下内視鏡的粘膜切除術の治療成績に関する多施設共同研究

主任研究者	施設名・所属科	役職	研究テーマ
桑井 寿雄	広島大学病院 消化器内視鏡医学講座	寄付 講座教授	難治性食道良性狭窄の革新的治療を目指した 新規生体吸収性ステントの開発
小林 聡	九州大学大学院 医学研究院泌尿器科	講師	本邦における尿管鏡支援ロボットへのパラダイムシフトを見据えた軟性尿管鏡 AI-based SaMD 開発研究
齋藤 圭	日本大学医学部附属板橋病院 消化器肝臓内科	准教授	高脂質・糖質制限経腸栄養剤の ERCP 前投与による ERCP 後膵炎予防効果の検討
島谷 昌明	関西医科大学 総合医療センター 消化器肝臓内科	教授	膵管空腸吻合部狭窄/閉塞症例に対する Gel Immersion Endoscopy を応用した新規内視鏡治療法の開発
鈴木 健人	日本医科大学付属病院 呼吸器外科	助教	肺癌に対する新しい経気管支鏡的光治療法 iTAP の開発
高井 理彩	東京大学大学院 医学系研究科産婦人科	大学院生	カメラスコープ先端・剥離領域間の距離の自動推定による腹腔鏡下子宮全摘術技能評価 AI モデルの構築
高田 和典	静岡県立静岡がんセンター 内視鏡科（下部消化管）	医長	非有茎性大腸腺腫に対する新たな低侵襲治療の安全性を検証する多施設前向き共同研究
高本 健史	東京大学医学部 肝胆膵・人工臓器移植外科	講師	拡張現実（AR）技術を用いた内視鏡映像重畳型・術中超音波システムの肝胆膵内視鏡外科における臨床的有用性の検証
田丸 弓弦	NHO 呉医療センター 内視鏡内科	医師	大腸 ESD 後の post-ESD coagulation syndrome に関する多機関共同ランダム化比較試験 ～入院期間短縮は可能か？～
中村 拳	日本医科大学武蔵小杉病院 消化器内科	助教 ・医員	ELST-blue と apolipoprotein A2-i Index を用いた早期慢性膵炎の層別化の検討
中村 卓也	信州大学医学部 脳神経外科	助教	脳室内病変に対する神経内視鏡下カテーテルの新規開発
橋口 慶一	長崎大学病院 光学医療診療部	講師	カダバー・トレーニングシステムによる上部消化管内視鏡治療教育システムの構築
橋本 浩平	杏林大学医学部付属病院 呼吸器外科	診療 科長 ・教授	低侵襲スリーブ気管支形成術におけるロボットと胸腔鏡アプローチの学習曲線の比較
濱路 政嗣	奈良県立医科大学 胸部・心臓血管外科	准教授	未来の内視鏡手術における、新しい吸収性素材を用いた自動縫合器の開発
平塚 孝宏	大分大学医学部 総合外科・地域連携学講座	准教授	閉塞性大腸癌に対する新たな治療戦略構築に向けた Covered ステントの ctDNA モニタリングによる腫瘍学的影響の前向き検証
福井 崇将	京都大学大学院医学研究科 呼吸器外科	大学院生	蛍光気管支鏡を用いた気管血流評価法

主任研究者	施設名・所属科	役職	研究テーマ
藤本 愛	東邦大学医療センター 大森病院 消化器内科	准教授	Red Dichromatic Imagingによる早期胃癌深達度診断の可能性～粘膜下層深部浸潤癌と潰瘍性病変の鑑別における探索的臨床研究～
前川 聡	大阪けいさつ病院 消化器内科	副部長	80歳以上食道表在癌患者における骨格筋・脂肪量評価に基づく治療選択モデルの開発
増子 弘明	新潟大学大学院 医歯学総合研究科 消化器内科学分野	大学院生	内視鏡スコープの簡易洗浄プロセスの確立と Aggregation-Induced Emission 蛍光染色法を用いた迅速評価法の提案
松本 一宏	慶應義塾大学医学部 泌尿器科	講師	ロボット支援下前立腺全摘除術教育の高度化を目指した、患者特異的・生体類似型臓器モデルの開発
松本 啓志	川崎医科大学 消化器内科学	准教授	内視鏡下バイオフィルム分類システムの確立と大腸がんリスク層別化への応用
村田 雅樹	独立行政法人国立病院機構 京都医療センター 消化器内科	医師	Helicobacter pylori 未感染胃癌における Non-Helicobacter pylori Helicobacter 感染症の実態解明：多施設共同前方視的観察研究
八木 伸	横浜市立大学附属病院 肝胆膵消化器病学	助教	胆道閉塞を伴う切除可能/切除可能境界膵癌に対する、超音波内視鏡下胆管胃吻合術による術前胆道ドレナージに関する多機関共同前向き観察研究
山口 太輔	佐賀大学医学部 内科学講座消化器内科	特定講師	大腸内視鏡シミュレーターによる専修医の大腸内視鏡挿入技能向上：国際多施設クラスターランダム化比較試験
山重 大樹	国立がん研究センター 中央病院 肝胆膵内科	修練医	マルチモーダル AI を用いた膵神経内分泌腫瘍 Grade 予測システムの開発
山下 泰伸	和歌山県立医科大学 第二内科	講師	胆道閉塞を伴う切除不能胆道癌に対するゲムシタビン+シスプラチン+免疫チェックポイント阻害薬に内視鏡的ラジオ波焼灼術併用治療の有効性を検証する多施設共同無作為化比較第 III 試験
横田 武尊	福島県立医科大学 東白川整形外科アカデミー	助教	内視鏡下屈筋腱縫合の新規手術法と専用デバイスの開発研究
柳 舜仁	川口市立医療センター 消化器外科	副部長	AI 手術支援の臓器損傷認識・予防効果を検証するビデオレビュー多施設共同研究
渡邊 健太	秋田大学医学部附属病院 消化器内科	特任助教	健診内視鏡におけるバレット食道の10年間での経時的変化についての検討

多施設共同研究助成 (新規2件) (継続5件)

(新規) 第1年次

五十音順・敬称略

主任研究者	施設名・所属科	役職	研究テーマ
阿部 清一郎	国立がん研究センター 中央病院 内視鏡科	医長	食道癌内視鏡的粘膜下層剥離術後狭窄に対する EBD 単独療法およびステロイド局注併用 EBD 療法のランダム化比較第Ⅲ相試験 (JCOG2215)
山田 玲子	三重大学医学部附属病院 消化器肝臓内科	講師	切除不能悪性遠位胆管狭窄に対する 6mm 径と 10mm 径の Fully covered Self-Expandable Metal Stents の多施設共同前向き比較試験

(継続) 第2年次

五十音順・敬称略

主任研究者	施設名・所属科	役職	研究テーマ
笹平 直樹	がん研究会有明病院 肝胆膵内科	部長	切除不能膵癌に伴う遠位胆管閉塞に対するカバー付き金属ステント不応後の Duckbill 型逆流防止弁付き金属ステント治療に関する多施設共同無作為化比較試験
吉田 将雄	静岡県立 静岡がんセンター 内視鏡科	医長	20mm 以下の非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍に対する標準治療を確立する多施設共同ランダム化比較試験

(継続) 第3年次

五十音順・敬称略

主任研究者	施設名・所属科	役職	研究テーマ
井上 達哉	日本医科大学 呼吸器外科	病院講師	末梢型肺癌に対する光線力学的治療 (PDT) におけるレーザードシメトリーに関する後方視的研究
関口 正宇	国立がん研究センター 中央病院 内視鏡科/検診部門	医長	人工知能によるコンピュータ検出支援を用いた大腸内視鏡検査の大腸がん検診における有効性と医療経済性評価に関するアジア多施設共同研究
山崎 泰史	岡山大学病院 光学医療診療部	助教	10-20mm の大腸鋸歯状病変に対するコールドスネアポリペクトミーの有用性を検証する非盲検化ランダム化比較試験

内視鏡医学研究医海外派遣助成

1. 事業概要

本助成は、国際学会に採択された研究成果について、研究者が現地に赴き発表を行う機会を支援するものである。対象は、国際学会において口頭発表で採択された、将来の内視鏡医学を担う原則 45 歳以下の若手研究医である。

国際学会における研究成果の発信を通じて学術的評価や知見を得ることで、研究のさらなる発展を促し、内視鏡医学の進歩および医療の向上に寄与することを目的としている。

2. 助成内容

渡航先地域に応じて、海外学会への参加に係る費用の一部を助成する。

アジア地域：15 万円

北米等：25 万円

欧州等：35 万円

※ 燃油サーチャージの高騰や為替の影響で令和 7 年度は一律 5 万円を加算した。

3. 成果概要

令和 7 年度は 16 件の研究発表を支援し、各専門分野における国際学会で研究成果の発表が行われた。成果報告からは、研究成果の国際的な発信に加え、海外研究者との学術交流や最新知見の収集を通じて研究内容への理解を深め、新たな研究展開につながる知見を得たことがうかがえた。

本助成は、研究成果を世界へ発信する機会を提供するとともに、研究のさらなる発展を促進し、内視鏡医学の振興に寄与するものである。

4. 令和7年度助成実績(16件・4,100千円)

五十音順・敬称略

NO	研究者	施設名・所属科	発表 学会名	開催地	開催期間	掲載 ページ
1	溝部 玲衣	慶應義塾大学病院 内視鏡センター	ESGE days	スペイン	4月3日～5日	8
2	伊藤 守	東京慈恵会医科大学 内視鏡医学講座	DDW	アメリカ	5月3日～6日	9
3	石川 和真	札幌医科大学 腫瘍内科学講座	DDW	アメリカ	5月3日～6日	10
4	笠原 健大	東京医科大学病院 消化器外科・小児外科	EAES	セルビア	6月17日～20日	11
5	馬場 七織	千葉大学大学院医学研究院 産婦人科学	APAEG	中国	9月4日～7日	12
6	高井 理彩	東京大学大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻	APAEG	中国	9月4日～7日	13
7	小林 憲市	滋賀医科大学 泌尿器科学講座	WCE	アメリカ	9月8日～12日	14
8	豊澤 惇希	岡山大学病院 消化器内科	UEGW	ドイツ	10月4日～7日	15
9	高橋 春奈	静岡県立総合病院 消化器内科	UEGW	ドイツ	10月4日～7日	16
10	清水 孟	仙台市医療センター 仙台オープン病院 消化管・肝胆膵内科	UEGW	ドイツ	10月4日～7日	17
11	神田 修平	京都大学大学院医学研究科 肝胆膵・移植外科学	ACS	アメリカ	10月4日～7日	18
12	菅野 圭	金沢大学附属病院 消化管外科	WCES /ELSA	シンガポール	11月5日～8日	19
13	金丸 薫子	神戸大学医学部附属病院 消化器内科	APDW	シンガポール	11月18日～22日	20
14	柳 舜仁	川口市立医療センター 消化器外科	SAGES	アメリカ	3月25日～28日	21
15	笠井 麻衣	戸田中央総合病院 外科・消化器外科	SAGES	アメリカ	3月25日～28日	22
16	真崎 純一	東京医科大学病院 消化器外科・小児外科	SAGES	アメリカ	3月25日～28日	23

NO. 1

研究テーマ	十二指腸主乳頭近傍の病変に対する内視鏡的粘膜下層剥離術の実現可能性
研究者	慶應義塾大学病院 内視鏡センター 溝部 玲衣
派遣先学会	ESGE Days 2025 (European Society of Gastrointestinal Endoscopy Days 2025)
派遣期間	2025年4月3日～4月5日
開催国	スペイン・バルセロナ

成果報告

本研究は、表在型非乳頭部十二指腸上皮性腫瘍 (SNADET) のうち、主乳頭に近接する病変に対する内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) の実現可能性および安全性を評価することを目的として実施された。従来、十二指腸 ESD は遅発性偶発症のリスクが高い治療とされてきたが、近年は内視鏡的縫縮技術の進歩により安全性の向上が期待されている。一方で、主乳頭近傍の病変では縫縮が困難となる可能性があり、その治療戦略は十分に確立されていない。

本研究は単施設後向き観察研究として、2020年1月から2024年4月までに施行された十二指腸 ESD 症例のうち、主乳頭を巻き込まないが10mm以内に近接する病変を対象に検討を行った。その結果、対象28例すべてにおいて一括切除が達成され、術中穿孔は1例に認められた。主乳頭に切除が及んだ症例や完全縫縮が困難であった症例では遅発性偶発症が認められた。一方、主乳頭を温存し完全縫縮が達成された症例においても、遅発性偶発症は一定割合で発生しており、特に主乳頭と切除ラインが接する症例において発生頻度が高いことが示された。なお、すべての症例において緊急手術を要する事態は認められなかった。

これらの結果より、主乳頭近傍という高リスク領域においても ESD は一定の実現可能性を有する一方で、主乳頭との位置関係が偶発症リスクに影響する重要な因子であることが明らかとなった。

学会発表においては、ESD と内視鏡的粘膜切除術 (EMR) の適応の違いや、十二指腸 ESD 後の管理体制に関する質問が寄せられ、本領域における治療選択および術後管理に対する関心の高さが示された。

このたびは海外学会にあたりご支援くださりありがとうございました。

NO. 2

研究テーマ	コンピュータ検出支援が内視鏡医の脳血流に与える影響：経験者と初学者の比較検討
研究者	東京慈恵会医科大学 内視鏡医学講座 伊藤 守
派遣先学会	DDW 2025 (Digestive Disease Week 2025)
派遣期間	2025年5月3日～6日
開催国	アメリカ・サンディエゴ

成果報告

本研究は、大腸内視鏡用コンピュータ診断支援 (Computer-aided diagnosis: CAD) 介入時における内視鏡医の認知状態の変化について、前頭前野の脳血流変化を指標として評価したものである。

被験者は、近赤外分光法 (functional near-infrared spectroscopy: fNIRS) および視線計測機能を搭載した VR ディスプレイを用い、大腸内視鏡検査動画を CAD 解析の有無でそれぞれ読影した。内視鏡医 12 名 (大腸内視鏡検査歴 500 件未満の初学者 5 名、500 件以上の熟練者 7 名) を対象に検討を行った。

その結果、CAD 使用時には、初学者において右前頭前野の脳血流低下が認められた一方、熟練者においては左前頭前野の脳血流増加が認められた。これらの結果から、CAD 介入により熟練者において脳血流量が有意に増加することが示された。

本発表は、「Topic Forum: How to Get From Here to There: AI Driven Innovations in Colonoscopy」において口頭発表として行われた。質疑応答では、本手法が全大腸内視鏡検査に適用可能かについて質問があり、本研究は動画ベースの解析による実現可能性試験であり、タスクブロックデザインを用いた研究であること、また全大腸内視鏡検査の臨床現場での解析についても検討中である旨を説明した。

さらに、セッション終了後には同セッションの演者より、本研究成果が AI と人間の相互作用に関する知見として評価された。

この度はご支援いただき誠にありがとうございました。

NO. 3

研究テーマ	悪性肝門部胆管狭窄の術前胆道ドレナージ
研究者	札幌医科大学 腫瘍内科学講座 石川 和真
派遣先学会	DDW 2025 (Digestive Disease Week 2025)
派遣期間	2025年5月3日～6日
開催国	アメリカ・サンディエゴ

成果報告

本研究は、手術を予定する悪性肝門部胆道閉塞 (MHBO) 症例における術前胆道ドレナージ (PBD) の方法の違いが、胆管炎発症および門脈塞栓術 (PVE) 後の予定残肝容積 (FLR) 増大に与える影響について検討したものである。

従来、本邦の胆道癌診療ガイドラインでは、PVE 後の FLR 肥大を最大化する目的で、予定残肝側のみをドレナージする片葉ドレナージ (UD) が推奨されてきた。一方で、近年では UD と両葉ドレナージ (BD) との間で FLR 増大に差がないとする報告もみられており、また胆管炎の観点からは BD の有用性も指摘されているが、術前胆管炎リスクへの影響については十分な検討がなされていなかった。

本研究では、2011 年から 2023 年に国内 5 施設で PBD を受けた Bismuth type II 以上の MHBO 163 例を対象とし、UD 群 106 例、BD 群 57 例に分類して、背景因子、胆管炎発症までの期間および PVE 後の FLR 増大 (Δ FLR) について比較検討を行った。また、胆管炎に関連する独立因子を明らかにするため、多変量 Cox 回帰解析を実施した。

その結果、背景因子に有意差は認められなかったが、PVE 実施率および手術待機期間は BD 群で有意に高かった。胆管炎発症までの期間は BD 群で有意に延長しており、多変量解析においても BD およびインサイドステント (IS) の使用が胆管炎リスクを低減する独立因子として示された。また、PVE 後の Δ FLR についても BD 群で有意に大きい結果が得られた。

以上より、BD は胆管炎発症までの期間を延長するとともに、PVE 後の FLR 増大を損なわないことから、MHBO 術前管理において有用な PBD 戦略となり得ることが示された。

本研究の実施および学会参加にあたり、貴財団のご支援により貴重な経験を得ることができた。

NO. 4

研究テーマ	Innovations in MIS Techniques for Splenic Flexure Colon Cancer : From Laparoscopic Surgery to Robotic Surgery
研究者	東京医科大学病院 消化器外科・小児外科 笠原 健大
派遣先学会	EAES2025 (European Association for Endoscopic Surgery Annual Meeting 2025)
派遣期間	2025年6月17日～20日
開催国	セルビア ・ ベオグラード

成果報告

本研究は、脾彎曲部結腸癌に対する低侵襲手術（MIS）の手技および手術成績について検討したものである。脾彎曲部結腸癌は発生頻度が低く、解剖学的にも複雑であることから、外科的治療において技術的難易度が高いとされている。

当院では、ロボット支援腹腔鏡手術（RALS）において、膵臓を指標とした「PunC (pancreas-guided cordal)」アプローチを開発しており、本研究では当該術式の有用性を評価した。2013年から2024年に東京医科大学病院で脾彎曲部結腸癌に対してMISを施行した65例を対象に、後ろ向きに解析を行い、腹腔鏡手術（LS：47例）とロボット手術（RALS：18例）を傾向スコアマッチングにより比較検討した。

術式としては、下行結腸は従来の腹腔鏡手術を用い、横行結腸はPunCアプローチにより処理した。具体的には、下腸間膜静脈（IMV）に沿った正中アプローチ、下腸間膜動脈（IMA）の温存、左結腸動脈（LCA）の切離、膵下縁の展開、#223リンパ節郭清、腸管切離を行った。

その結果、RALS群では体内吻合の頻度が高く、出血量の減少および術後炎症反応（CRP値）の低下が認められた。一方で、手術時間、術後合併症、入院期間、リンパ節郭清数については両群間で有意差は認められなかった。

以上より、脾彎曲部結腸癌に対するRALS（ロボット支援腹腔鏡手術）におけるPunCアプローチは、LS（腹腔鏡手術）と比較して出血量および炎症反応を軽減し、短期成績の向上に寄与する可能性が示唆された。

質疑応答では、ロボット支援手術の実施割合について質問があり、当該施設では90%以上の症例で実施している旨が示された。

NO. 5

研究テーマ	Artificial intelligence recognition model for the retraction Quality objective evaluation for Total Laparoscopic Hysterectomy
研究者	千葉大学大学院医学研究院 産婦人科学 馬場 七織
派遣先学会	APAGE2025 (Asia-Pacific Association for Gynecologic Endoscopy and Minimally Invasive Therapy)
派遣期間	2025年9月4日～7日
開催国	中国・上海

成果報告

APAGE (アジアオセアニア婦人科内視鏡学会) において、「Artificial intelligence recognition model for the retraction quality objective evaluation for Total Laparoscopic Hysterectomy」に関する研究成果を発表した。

本研究は、「retractionの質の数値化」と、それを深層学習に基づいて人工知能(AI)に学習させる試みを行ったものであり、retractionを客観的に評価可能なシステムの構築を目的としたものである。熟練した婦人科医師10名に約4,500枚の画像を提示し、各画像に対してスコアを付与した評価データを用いて深層学習を実施した。

その結果、retractionの質を定量的に評価するAIモデルを構築するに至り、retractionの客観的評価に向けた新たな可能性が示された。今後は、本AIシステムを手術技能評価へ応用し、術者の技能差によるretractionの質の違いについて検証を進める予定である。

質疑応答では、数値化されたretractionの質の評価方法について質問があり、熟練医による画像ごとのスコアリング結果をもとに学習を行った旨を説明した。

また、海外学会での発表を通じて、英語によるプレゼンテーション能力の向上を図るとともに、各国の医師との交流を通じて医療制度や文化の違いに対する理解を深める機会となった。

これらの経験は、今後の研究活動および国際的な学術ネットワークの構築に寄与するものと考えられる。

NO. 6

研究テーマ	腹腔鏡下子宮全摘術における2つの剥離認識AIモデルの開発
研究者	東京大学大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻 高井 理彩
派遣先学会	APAGE2025 (Asia-Pacific Association for Gynecologic Endoscopy and Minimally Invasive Therapy)
派遣期間	2025年9月4日～7日
開催国	中国・上海

成果報告

本研究では、腹腔鏡下子宮全摘術 (TLH) における剥離の効率性評価を目的として、「広義の剥離」と「狭義の剥離」を認識する2種類の深層学習モデルの構築とその適用性について検討した。

広義の剥離は、電気メスやエネルギーデバイスなど剥離に用いる器具が画面上に出現する場面と定義し、腹腔鏡下S状結腸切除術87例およびTLH32例から抽出した約117万枚の画像を用いて、「広義の剥離／術野展開／無効操作／体外」の4分類で学習を行った。TLH2例の正解データとの比較では、Precision 0.986、Recall 0.753、F1 score 0.847、Accuracy 0.839の結果が得られた。

一方、狭義の剥離は実際に通電している場면을剥離と定義し、4術式計157例から抽出した画像 (Harmonic 約8万枚、Ligasure 約2万枚、電気メス約140万枚) を用いて、器具別に通電あり／なしの2分類で学習を行った。TLH1例での検証では、F1 score は Harmonic 0.868、Ligasure 0.596、Probe Plus 2 (Spatula) 0.357、同 (Light-angle) 0.294であった。

これらの結果より、エネルギーデバイス (Harmonic、Ligasure) は通電時に組織を把持する視覚的変化があるため認識精度が高い一方、電気メスは組織変化が微細であり認識精度は不十分であった。以上より、広義の剥離認識モデルはTLHにおいても応用可能性が高い一方、狭義の剥離認識モデルについては特に電気メスにおいて精度向上に向けたさらなる改良が必要であることが示された。

本研究成果については国際学会において発表を行い、滞りなく終了した。時間の都合により質疑応答は実施されなかったが、初めての国際学会における英語での発表を通じて、国内外の知見に触れるとともに、同年代の研究者から大きな刺激を受ける機会となった。

本経験を通じて、今後の研究活動に一層取り組む意欲を高めるとともに、貴財団からのご支援により貴重な機会を得られたことに深く感謝申し上げます。

NO. 7

研究テーマ Laparoscopic ureterolysis for ureterosciatic hernia: a case report

研究者 滋賀医科大学 泌尿器科学講座 小林 憲市

派遣先学会 WCE2025 (World Congress of Endourology 2025)

派遣期間 2025年9月8日～12日

開催国 アメリカ・フェニックス

成果報告

尿管坐骨孔ヘルニアは稀な疾患であり、これまでに約50例程度の症例報告があるのみとされている。そのうち約半数は保存的治療に関する報告であり、外科的治療による修復の報告はさらに限られている。また、手術動画としての報告はこれまでになく、加えて外科的治療の多くはメッシュを用いた修復術であり、人工物を使用しない手術報告は少ない。

本報告では、陥頓した尿管を腹腔内へ移動させる Transperitonization により治療した症例について、手術動画を用いて発表した。これにより、従来の文献では理解が難しかった尿管の陥頓部位および修復部位を明瞭に示すことができた。

発表後の質疑応答では、ステント留置を選択しなかった理由や、メッシュの準備に関する質問が寄せられ、今後の論文化に向けて有意義な議論を行うことができた。

また、本学会は内視鏡手術や新規技術に関する発表が多く、特に前立腺に対する FOCAL Therapy に関する最新の知見について多くの報告があり、今後の診療および研究に資する知見を得る機会となった。

NO. 8

研究テーマ 大腸 UEMR におけるゲル下と浸水下での内視鏡視野の改善効果の検討
: 無作為化クロスオーバー試験

研究者 岡山大学病院 消化器内科 豊澤 惇希

派遣先学会 UEGW2025 (United European Gastroenterology Week 2025)

派遣期間 2025年10月4日～7日

開催国 ドイツ・ベルリン

成果報告

本研究は、大腸に対する Underwater Endoscopic Mucosal Resection (UEMR) において、ゲル製剤（ピスコクリア）と生理食塩水を使用した場合の内視鏡視野の改善効果について、無作為化クロスオーバー試験により比較検討したものである。

主要評価項目は病変辺縁における腫瘍部と非腫瘍部の色差とし、白色光および BLI 観察下において評価を行った。その結果、ゲル製剤を使用した場合において、いずれの観察方法においても色差が大きい結果が得られた。色差の増大は病変境界の視認性向上を示すものであり、大腸 UEMR におけるゲル製剤の視認性に関する有効性を示した初の報告である。

本研究成果については、「Improved Endoscopic Visibility with Gel Versus Water Immersion During Colorectal Underwater EMR: A Randomized Crossover Trial」としてオーラルプレゼンテーションを行った。質疑応答では、ゲルの注入方法および空気を用いた場合との比較について質問があり、ウォータージェットポンプを用いた注入方法や流量調整の工夫、ならびに UEMR における本手法の利点について説明した。

また、本学会では他の演題も聴講し、多様な知見を得ることができ、有意義な学会参加となった。

NO. 9

研究テーマ	悪性遠位胆道閉塞に対する ERCP 時の予防的抗菌薬投与は感染性合併症を低減するか
研究者	静岡県立総合病院 消化器内科 高橋 春奈
派遣先学会	UEGW2025 (United European Gastroenterology Week 2025)
派遣期間	2025 年 10 月 4 日～7 日
開催国	ドイツ ・ ベルリン

成果報告

本研究は、悪性遠位胆道閉塞に対する内視鏡的逆行性胆道膵管造影（ERCP）施行時における予防的抗菌薬投与の有効性について検討したものである。当院を含む全国5施設による後ろ向き多施設共同研究として実施され、抗菌薬投与群と非投与群における ERCP 後感染性合併症（胆管炎・胆嚢炎）の発生率を比較した。さらに、性別、年齢、基礎疾患、ステント種類などを考慮したサブグループ解析を行った。

その結果、抗菌薬の予防投与は全体として ERCP 後感染性合併症の発生を抑制する効果を示し、とくに胆管炎において有意な予防効果が認められた。現在の ESGE および ASGE のガイドラインでは限定的な推奨にとどまっているが、本研究結果はこれらの指針に対して再検討の必要性を示唆するものである。

本研究成果については、「Efficacy of prophylactic antibiotics during ERCP for distal malignant biliary obstruction」として、胆膵領域の Interventional Endoscopy セッションにて口演発表を行った。発表後の質疑応答では、抗菌薬の投与期間および投与タイミング、非膵がん症例の内訳、感染原因菌の評価（血液培養を含む）などについて質問が寄せられた。これに対し、施設間でのプロトコル統一やデータ収集上の限界について説明するとともに、今後の前向き研究の必要性について言及した。

また、質疑を通じて、欧州施設においても同様の課題認識が共有されていることが明らかとなり、本テーマの臨床的意義の高さを再認識する機会となった。

本発表および討論を通じて、研究成果を国際的に発信する重要性と課題を実感するとともに、得られた知見を今後の研究および臨床活動へ還元していく意義を認識した。

NO. 10

研究テーマ	Prospective Evaluation of Acetic Acid-Enhanced Magnifying Endoscopy as a Substitute for Crystal Violet Staining in Pit Pattern Classification of Colorectal Epithelial Neoplasms
研究者	仙台市医療センター仙台オープン病院 消化管・肝胆膵内科 清水 孟
派遣先学会	UEGW2025 (United European Gastroenterology Week 2025)
派遣期間	2025年10月4日～7日
開催国	ドイツ・ベルリン

成果報告

本研究は、大腸表在型腫瘍に対する酢酸撒布下 NBI 拡大観察とクリスタルバイオレット染色拡大観察の診断能について、前向きに比較検討したものである。10月6日の「Lower GI: Before resection comes a good characterization」セッションにおいて発表を行った。

JNET type 2B または 3 と診断した病変を対象に、4.5%酢酸撒布下 NBI 拡大観察 (ANBI-ME) とクリスタルバイオレット染色拡大観察 (CV-ME) を連続して施行した 300 病変を前向きに収集し、そのうち 296 病変を解析対象とした。2名の expert による合意診断における pit pattern の正診率は、ANBI-ME で 58%、CV-ME で 51%と、ANBI-ME が有意に高い結果であった。また、inter-methodology agreement はそれぞれ $\kappa=0.65$ および 0.62 と良好であり、inter-observer agreement についても ANBI-ME で $\kappa=0.78$ 、CV-ME で $\kappa=0.62$ と良好な一致率を示した。

さらに、酢酸撒布による可逆的的白色化の持続時間は、Low grade dysplasia において High grade dysplasia や SM1、SM2 病変と比較して有意に短いことが示された。

以上より、ANBI-ME (酢酸撒布下 NBI 拡大観察) は CV-ME (クリスタルバイオレット染色拡大観察) に対する有用な代替法となる可能性が示されるとともに、白色化持続時間は新たな診断指標となる可能性が示唆された。

質疑応答では、ANBI-ME が CV-ME の pit pattern 診断に容易に応用可能かとの質問に対し、本研究は 2名の expert による診断であり応用可能性があること、またクリスタルバイオレットは弱い発癌性が指摘されており代替法の開発が求められていることを説明した。さらに、4.5%酢酸の濃度に関する質問に対しては、上部消化管と異なり誤嚥性肺炎のリスクが低く、出血などの有害事象の頻度も 1.5%酢酸と比較して増加していないことを回答した。

NO. 11

研究テーマ	Specific Tumor Identification By Fluorescence Imaging Targeting Glypican-3 In A Mouse Model Of Hepatocellular Carcinoma
研究者	京都大学大学院医学研究科 肝胆膵・移植外科学 神田 修平
派遣先学会	ACS2025 (American College of Surgeons Clinical Congress 2025)
派遣期間	2025年10月4日～7日
開催国	アメリカ ・ シカゴ

成果報告

本研究は、肝細胞癌に対する新規腫瘍特異的蛍光プローブ「GPC3-IRDye800」を開発し、その腫瘍同定能について前臨床マウスモデルを用いて検討したものである。

まず、2016年から2024年に当院で施行された腹腔鏡下肝切除症例を対象に、ICG 蛍光ナビゲーションによる腫瘍同定率を解析した結果、同定率は68%にとどまり、既存手法の限界が示された。続いて、臨床検体を用いた分子生物学的解析により、GPC3 の mRNA 発現が非癌部と比較して癌部で有意に高値であること ($p < 0.001$)、および免疫組織化学染色において癌部での GPC3 陽性率が82%と高値であることを確認した。

これらの結果を踏まえ、GPC3 を標的としたモノクローナル抗体と近赤外蛍光色素 IRDye800 を結合し、新規蛍光プローブ GPC3-IRDye800 を作製した。ヒト肝細胞癌細胞株 HuH7 を用いた異種移植マウスモデルにおいて検証した結果、GPC3-IRDye800 は投与後 168 時間においても強い蛍光を維持し、negative control および ICG と比較して腫瘍/背景比が有意に高いことが確認された ($p < 0.05$)。また、摘出臓器の蛍光解析においても、肝細胞癌に特異的な蛍光シグナルを示し、他臓器での非特異的集積は認められなかった。

以上より、GPC3-IRDye800 は肝細胞癌を高感度かつ特異的に同定可能な新規蛍光プローブであり、将来的には内視鏡外科手術における腫瘍マージンの可視化や手術精度向上に寄与する可能性が示唆された。

発表後の質疑応答では、他の分子標的との比較、蛍光持続時間の臨床的意義、マウスモデルの妥当性、GPC3 発現の生物学的特性などについて質問が寄せられた。これに対し、他の肝癌関連分子との比較検討の必要性や、長時間にわたり安定した蛍光強度が得られることの利点、モデルの限界、GPC3 発現の特徴について説明を行った。

これらの議論を通じて、本蛍光プローブが肝細胞癌における新たなナビゲーション手段として評価され、今後の臨床応用に向けた共同研究の可能性についても関心が示された。

NO. 12

研究テーマ Initial Clinical Experience and Short-Term outcomes of Colorectal Cancer Surgery Using the Japanese hinotori Surgical Robotic System

研究者 金沢大学附属病院 消化管外科 菅野 圭

派遣先学会 ELSA・WCES2025
The 21st World Congress of Endoscopic Surgeons
The 17th Asia Pacific Endo-Laparoscopic Surgeons

派遣期間 2025年11月5日～8日 **開催国** シンガポール

成果報告

本報告では、日本で開発された手術支援ロボットシステム「hinotori」を用いた大腸癌手術の初期臨床経験について検討した。hinotoriは、8軸構造の操作アームやソフトウェアで定義される器具ピポットポイントなどの特徴を有し、術中の操作性や作業環境（エルゴノミクス）の向上が期待されるシステムである。

当院では2023年1月よりhinotoriシステムを導入し、2024年から大腸癌手術へ適用した。本研究では、患者背景、手術詳細、周術期成績について後方視的に解析を行い、hinotori群とda Vinci Xiシステム群に分けて比較検討した。

hinotori群では21例（低位前方切除9例、右半結腸切除9例、左側結腸切除3例）を対象とした。学習曲線の解析では、コンソール時間およびロールイン時間はいずれも7例目前後で安定しており、この初期症例を除外した14例を解析対象とした。da Vinci群61例との比較では、患者背景、術中合併症、開腹移行、Clavien-Dindo分類グレード3以上の術後合併症に差は認められなかった。

手術時間およびコンソール時間については、両群間および術式別で有意差は認められなかった。一方で、ロールイン時間は右側結腸および直腸手術においてhinotori群で有意に長く、ドッキング操作の煩雑さが影響している可能性が示唆された。

以上より、hinotoriを用いた大腸癌手術は、da Vinci Xiシステムと比較しても安全に施行可能であることが示唆された。加えて、アーム構造や操作性の特徴により術中の操作性向上や術者間のコミュニケーション促進に寄与する一方で、導入初期には準備時間を要するものの、症例の蓄積により効率の改善が認められた。

質疑応答では、hinotoriシステムの利点および課題、今後の普及可能性について議論が行われた。

NO. 13

研究テーマ	背景膵における線維化と前癌病変の EUS での予測
研究者	神戸大学医学部附属病院 消化器内科 金丸 薫子
派遣先学会	APDW2025 (Asian Pacific Digestive Week 2025)
派遣期間	2025 年 11 月 18 日～22 日
開催国	シンガポール

成果報告

本研究は、超音波内視鏡検査（EUS）により観察される早期慢性膵炎所見と、膵線維化の組織学的所見および前癌病変の頻度との関連を明らかにすることを目的として実施されたものである。

2025 年 11 月 22 日に本テーマに関する発表を行い、EUS 所見としての点状索状高エコーおよび分葉エコーについて検討した。その結果、これらの所見はいずれも膵体部における線維化の重症度および前癌病変の頻度と相関しており、とくに分葉エコーにおいて高い相関が認められた。

以上より、EUS における分葉エコーは、膵線維化や前癌病変を背景とする膵癌高リスク群を同定しうる所見である可能性が示唆された。

発表後の質疑応答では、本研究の臨床的意義について質問があり、本研究単独で膵癌を直接予測するものではないが、EUS 所見、特に分葉エコーの存在により膵線維化や前癌病変を多く有する高リスク患者の同定につながる可能性がある旨を説明した。

本研究成果を国際学会で発表することにより、国際的な評価を受ける機会となった。

今後は、これらの知見を基に、EUS 所見を用いた膵癌リスク層別化および効果的なサーベイランス戦略の確立への貢献が期待される。

NO. 14

研究テーマ	Real-time Enhanced Nerve Recognition for TME : A New Era of CoIorectal Navigation Surgery
研究者	川口市立医療センター 消化器外科 柳 舜仁
派遣先学会	SAGS 2026 (Society of American Gastrointestinal and Endoscopic Surgeons)
派遣期間	2026年3月25日 ~ 28日
開催国	アメリカ ・ タンパ

成果報告

本発表では、自律神経を可視化するAI手術ナビゲーション技術および近赤外蛍光イメージングを用いた蛍光尿管ナビゲーションの現状と課題について概説した。

神経のAIナビゲーションは多施設共同研究として実施され、日本において薬事承認を取得しており、今後は多施設前向き観察研究の開始が予定されている。一方、蛍光尿管ナビゲーションについては高い臨床的有用性が期待されているものの、普及が十分に進んでいない現状がある。本研究では、その要因として膀胱鏡による尿管カテーテル操作および泌尿器科への依存が主要なボトルネックであることを、日本全国の外科医124名を対象としたナショナルサーベイにより明らかにした。

このような背景を踏まえ、膀胱鏡操作を支援するAI技術の開発が進められており、現時点でF1スコア0.71の精度に到達している。

さらに将来的展望として、膀胱鏡AIにより蛍光尿管カテーテルを安全かつ円滑に挿入し、その後の腹部手術においてAI手術ナビゲーションおよび近赤外蛍光イメージングを併用する統合的ナビゲーション手術の実現が提案された。

質疑応答では、AIが医師を代替する可能性や、AIの過信によるリスクについて議論が行われた。これに対し、AIは医師を置き換えるものではなく、不完全性を内包する技術であるため、適切な理解と運用のもとで補助的に活用することの重要性が示された。

NO. 15

研究テーマ	大腸手術後吻合不全予防における3Dステープル技術の臨床的有用性
研究者	戸田中央総合病院 外科・消化器外科 笠井 麻衣
派遣先学会	SAGS 2026 (Society of American Gastrointestinal and Endoscopic Surgeons)
派遣期間	2026年3月25日 ~ 28日
開催国	アメリカ ・ タンパ

成果報告

大腸癌手術における Double Stapling Technique (DST) 吻合で使用する三次元 (3D) ステープルの臨床的有用性について発表した。

本研究では、2018年から2024年までに施行した大腸癌手術267例を対象として、従来型の二次元 (2D) ステープル使用群と三次元 (3D) ステープル使用群を後ろ向きに比較検討した。その結果、3Dステープル使用群では吻合不全発生率が有意に低下し、術後在院日数も短縮していた。3D構造による均一な組織圧迫と血流保持が、安全で安定した吻合形成に寄与している可能性について考察した。

質疑応答では、術後在院日数が比較的長い理由について質問があり、日本のDPC制度や日米における退院基準の違いについて説明した。また、吻合時に使用するステープルの厚みの選択基準について質問を受け、明確な基準は設けておらず、術中所見や組織の状態を踏まえて術者が判断していることを回答した。

。

NO. 16

研究テーマ	Robot-Assisted Bladder-Preserving TotalPelvic Exenteration (BP-TPE) for Locally Advanced Low Rectal Cancer:A NovelBeyond-TME Approach Aiming at Organ and Function Preservation
研究者	東京医科大学病院 消化器外科・小児外科 真崎 純一
派遣先学会	SAGS 2026 (Society of American Gastrointestinal and Endoscopic Surgeons)
派遣期間	2026年3月25日 ~ 28日
開催国	アメリカ ・ タンパ

成果報告

本発表では、局所進行下部直腸癌に対する膀胱温存ロボット支援 Beyond TME 手術 (BP-TPE) について、術式および手術成績を提示した。

本術式は、可能な限り Total Mesorectal Excision (TME) を施行しつつ、膀胱頸部や外尿道括約筋を温存することで臓器および機能の維持を目指すものである。具体的には、Retius 腔の開放後に膀胱頸部を温存し前立腺頭側を切離、肛門括約筋切離に伴う排尿機能低下を考慮し、背静脈叢 (DVC) や前立腺切離はバンチング後に cold cut で施行した。さらに、外尿道括約筋を可能な限り温存しつつ尾側前立腺および尿道を切離し、膀胱を腹側に固定して膀胱背側の TME を完成させた。尾側および腹腔側からの 2 チームアプローチにより会陰操作と連続させ、検体摘出および両側側方郭清を施行した後、膀胱前立腺吻合を行い、膀胱瘻造設により尿禁制維持および縫合不全予防を図った。

手術成績として、2013 年以降に進行下部直腸癌および前立腺浸潤症例に対して BP-TPE を 7 例施行しており、内訳はロボット手術 2 例、腹腔鏡手術 1 例、開腹手術 4 例であった。術後 1 年時点の尿禁制率は 70% であり、前立腺全摘術と比較しても、肛門括約筋を切除する本術式において良好な成績と考えられた。

以上より、BP-TPE は臓器温存と機能温存の両立を目指した新たな手術戦略として有用である可能性が示唆された。

質疑応答では、本術式がすべて自施設で施行されているかについて質問があり、自施設で一貫して実施している旨を説明した。

内視鏡医学研究医海外短期留学助成

1. 事業概要

本助成は、海外の大学等の研究機関において一定期間研究活動に従事する機会を支援し、内視鏡医学に関する研究能力の向上および将来の研究発展に資することを目的とする。対象は、国際的視野を有する原則 45 歳以下の若手研究医・臨床医であり、短期留学を通じて高度な研究手法や知見の習得を図る。

2. 助成内容

海外留学に係る渡航費および滞在費等として、1 件あたり 50 万円を助成する。

3. 成果概要

令和 7 年度は、海外研究機関における研究活動を行う研究医に 2 名に対して助成を行い、海外での研究を通じて、専門分野に関する知識・技術の習得が行われた。これらの成果は、帰国後の研究活動および臨床現場への還元が期待される。

4. 令和 7 年度助成実績(2 件・1,000 千円)

五十音順・敬称略

主任研究者	施設名・所属科	留学先	研究テーマ
大西 峻	鹿児島大学 小児外科	SSM Health Cardinal Glennon Children's Hospital	小児呼吸器内視鏡外科手術における安全な手技習得と症例経験蓄積による治療成績向上に関する研究
山口 太輔	佐賀大学医学部附属 病院 消化器内科	Mayo Clinic Arizona Gastroenterology	AI 搭載大腸内視鏡診断支援とコーンモデル挿入訓練を組み合わせた技能習得システムの有用性と国際運用可能性の研究

研究テーマ 小児呼吸器内視鏡外科手術における安全な手技習得と症例経験蓄積による治療成績向上に関する研究

研究者 鹿児島大学 小児外科 大西 峻

留学先 SSM Health Cardinal Glennon Children's Hospital

留学期間 2025年9月2日 ~ 2025年11月30日

成果報告

現在の所属施設では、2015年以降、小児内視鏡外科手術における高難度術式（胸腔鏡下食道閉鎖症根治術、胸腔鏡下肺葉切除術、腹腔鏡下胆道拡張症手術、腹腔鏡下鎖肛根治術）を導入し、良好な成績を得ている。一方、米国では1施設あたりの小児外科症例数が国内施設の約10倍（2,000～3,000例）に及ぶ場合もあり、短期間でも多くの症例を経験できる環境が整っている。特に小児呼吸器内視鏡外科手術は出血リスクの高い手技であり、より多くの手術を見学・経験することで知見を深めるとともに、将来的に指導的立場を担うことも見据え、本留学を決意した。

留学中は手術見学およびカンファレンスへの参加を通じて知識と技術の習得に努めた。また、小児胸腔鏡下肺切除術の標準化について、所属施設である鹿児島大学における術式（スコープおよび術者のワーキングポートを直線的に挿入し、肺門部を処理するアプローチ法）を紹介し、現地医師とのディスカッションを行った。さらに、より低侵襲な術式である区域切除についても意見交換を重ね、今後は胸腔鏡下肺切除術の術式別周術期合併症および長期予後に関する共同研究を実施する方針を確認した。

また、米国では日本と比較して広範囲の医療圏を担い、保険制度も大きく異なることから、入院期間や合併症に対する考え方などに違いがみられ、その医療体制の違いは大変印象的であった。小児呼吸器内視鏡外科手術は現在も発展途上の分野であり、成人領域とは異なる独自の発展を遂げている。所属施設では2016年から嚢胞性肺疾患に対する完全胸腔鏡下肺葉切除術を導入し良好な成績を得ているが、今後も国内外の最新の知見や報告を積極的に取り入れ、安全で質の高い胸腔鏡手術の実践に努めていきたい。

研究テーマ	AI 搭載大腸内視鏡診断支援とコロンモデル挿入訓練を組み合わせた技能習得システムの有用性と国際運用可能性の研究
研究者	佐賀大学医学部内科学講座 消化器内科 山口 太輔
留学先	Mayo Clinic Arizona (Division of Gastroenterology and Hepatology)
留学期間	2025年12月1日～2026年2月28日

成果報告

本留学では、Mayo Clinic Arizona において Visiting Scientist として研究活動に従事し、内視鏡診療および教育体制に関する知見の獲得と、国際共同研究の構築を目的とした取り組みを行った。

留学期間中は、研究データの収集に従事するとともに、内視鏡手技の見学を通じて、日本と海外における内視鏡診療および教育の相違について検討した。特に、内視鏡手技の進め方、教育体制、臨床現場における意思決定プロセスの違いについて実地で学ぶ機会を得た。

主たる研究成果として、大腸内視鏡シミュレーター (mikoto 大腸内視鏡モデル) を用いた専修医教育に関する国際多施設クラスターランダム化比較試験を立ち上げた。本研究は、大腸内視鏡経験 50 例未満の専修医を対象とした前向き研究であり、日本、米国、台湾の複数施設が参加している。主要評価項目は盲腸到達率、副次評価項目は盲腸到達時間、ADR、PDR とした。

研究の立ち上げにあたっては、倫理審査体制の違いや教育手法の相違といった国際共同研究特有の課題が明らかとなった。米国では IRB に加え Education Research Committee の審査が必要であり、また大腸内視鏡挿入手技についても各国で標準が異なることから、教育内容および技術評価の均てん化が課題となった。これらに対して、共通のシミュレータートレーニングを複数回実施することで、介入内容の標準化および研究実施体制の整備を行った。

本研究は現在も継続中であり、2026 年 7 月にデータ集積完了を予定している。限られた留学期間の中で、国際共同研究を立ち上げ、各国の制度や教育文化の違いを踏まえた研究基盤を構築できたことは重要な成果である。

本留学で得られた知見は、今後の臨床および研究活動へ活用する予定である。臨床面では、内視鏡診療および教育手法の改善に資する体制構築に応用し、研究面では本研究の遂行および成果発信を進めるとともに、内視鏡教育にとどまらず、鎮静、治療成績、偶発症対策などを含む国際共同研究へと発展させることで、消化器内視鏡診療および教育の発展への寄与が期待される。

海外研究医受入助成

1. 事業概要

本助成は、内視鏡医学の研究を目的として来日する海外研究医の受入を支援し、国内研究者との共同研究を通じて研究の推進を図ることを目的とする。

受入期間中は、研究活動を中心とした交流を行い、内視鏡医学分野における知見の共有および研究水準の向上に寄与することが期待される。

2. 助成内容

来日する研究医の航空運賃、滞在費および研究費の一部として、地域に応じて以下の助成金額を受入施設へ交付する。

アジア地域：35万円

欧米・オセアニア等：45万円

中南米・アフリカ：55万円

(※ 燃油サーチャージの高騰や為替の影響で令和7年度は一律5万円を加算した。)

3. 成果概要

令和7年度は、スペイン、モンゴル、インドネシア、ネパール、中国、トルコ、ベトナム、フィリピン、カンボジア、マレーシアから計12名の海外研究医を受け入れ、国内研究者との共同研究および研究交流を実施した。

受入期間中は、早期消化管癌に対する内視鏡診断・治療、膵胆道疾患に対する内視鏡治療、小児内視鏡外科手術、鏡視下手術、シミュレーション教育等をテーマとして、症例検討、手技見学、カンファレンスへの参加及び研究活動が行われた。また、内視鏡診断・治療技術に関する知見の共有に加え、各国の診療体制や医療課題について相互理解を深める機会となった。

さらに、一部の受入施設では国際共同研究や遠隔教育プログラムに関する検討も行われ、研究協力体制の構築や人的ネットワークの形成が図られた。

本事業を通じて得られた知識・技術・研究成果は、各海外研究医の帰国後の臨床・教育・研究活動へ還元されるとともに、本邦の研究者との継続的な交流・共同研究の発展が期待されるものであり、内視鏡医学分野における国際的な研究交流の推進と研究水準の向上に寄与した。

4. 令和7年度助成実績(12件・5,300千円)

敬称略

NO	海外研究医	所属	国籍	受入研究者	受入施設
1	MARIA ORTS INFANTE	University Hospital of Getafe, Madrid	スペイン	斎藤 豊	国立がん研究センター中央病院
2	BAYARSAIKHAN ochirchuulgan	Mongolian National University of Medical Science	モンゴル	松田 尚久	東邦大学医療センター大森病院
3	Didik Prasetyo	Moewardi Hospital Sebelas Maret University	インドネシア	松田 尚久	東邦大学医療センター大森病院
4	Jasmine Bajracharya	Nepal Medical college Teaching Hospital	ネパール	村上 雅一	鹿児島大学大学院
5	泰 斌	The Second Affiliated Hospital of Xi'an Jiaotong University	中国	入澤 篤志	獨協医科大学
6	Cemil Burak Kulle	イスタンブール 大学医学部	トルコ	仲田 興平	九州大学病院
7	Nguyen Tra My	ベトナム国家大学ハノイ校医科薬科学部	ベトナム	仲田 興平	九州大学病院
8	Tran Thi Ngoc Lan	ホーチミン医療センター内視鏡科	ベトナム	仲田 興平	九州大学病院
9	Tristan Paulo Madrigal	フィリピン総合病院 消化器内科	フィリピン	仲田 興平	九州大学病院
10	CHAN Raingsey	Preah Ang Duong Hospital, Phnom Penh, Cambodia	カンボジア	大村 和弘	東京慈恵会医科大学
11	Aynesha Letchmikanthan	Hospital Sultanah Bahiyah, Kedah	マレーシア	大村 和弘	東京慈恵会医科大学
12	Satria Dipo Putra Asmoro	RS Khusus THT Bedah KL Proklamasi, Jakarta, Fatmawati Hospital	インドネシア	大村 和弘	東京慈恵会医科大学

※令和7年度採択者12名のうち、令和8年6月現在9件の成果報告を掲載しています。

NO. 1

受入施設（申請者） 国立がん研究センター中央病院（内視鏡科 斎藤 豊）

海外研究医（国籍） MARIA ORTS INFANTE（スペイン）

研究期間 2025年9月1日～2025年10月31日

研究テーマ

早期消化管癌の Image-enhanced endoscopy 診断技術および ESD 技術の習得

大腸早期がんの JNET を用いた内視鏡診断の国際共同研究

ESD トレーニングにおけるラーニングカーブの国際共同研究

成果報告

MARIA ORTS INFANTE 医師は、海外研修医臨床修練許可を取得し、国立がん研究センター中央病院において早期胃癌、食道癌および大腸癌に対する内視鏡診断・治療技術の研修を行った。

研修期間中は、同院で実施されている先進的な内視鏡診断・治療を見学するとともに、大腸病変や胃炎に対する光学診断について学んだ。また、各種分類法や拡大内視鏡を用いた診断手法を習得し、正確な内視鏡診断の重要性について理解を深めた。

さらに、各種臨床カンファレンスに参加し、病歴、内視鏡所見および補助検査結果に基づく症例検討を通じて、多角的な視点から診断・治療方針を考察する機会を得た。これにより、内視鏡診療に関する知識と視野を広げることができた。

加えて、消化管腫瘍に対するトレーニングモデルを用いた ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）の実技研修を行い、手技の習得と技術向上に取り組んだ。

本研修を通じて得られた知識と技術は、今後の臨床活動および国際共同研究の発展に活かされることが期待される。

NO. 2

受入施設（申請者）	東邦大学医療センター大森病院（消化器センター内科 松田 尚久）
海外研究医（国籍）	BAYARSAIKHAN Ochirchuulgan（モンゴル）
研究期間	2025年10月6日～2025年10月24日
研究テーマ	膵胆道疾患および早期消化管癌の最先端診療の研究

成果報告

モンゴルと日本における膵胆道疾患および消化管疾患の病態や診療体制の違いについて理解を深めるとともに、膵胆道疾患に対する診断・治療技術の習得に取り組んだ。

モンゴルでは総胆管結石症の患者が多いことから、結石除去術を見学し、治療困難例に対する適切な治療戦略について学んだ。また、胆管ステントの種類や金属ステントの構造・特徴を理解し、それぞれの有効性や適応について知識を深めるとともに、膵管ステント留置術についても研修を行った。

さらに、IDUS（管腔内超音波検査）およびEUS（超音波内視鏡検査）の診断的有用性について学び、膵胆道疾患における実際の検査・診療を見学することで、適切な描出方法や診断技術に関する理解を深めた。

消化管領域では、早期消化器癌および炎症性腸疾患に対する内視鏡診断・治療について研修を行い、多くの知見を得た。本研修を通じて習得した知識と技術は、今後の臨床活動および研究活動に活かされることが期待される。

NO. 3

受入施設（申請者）	東邦大学医療センター大森病院（消化器センター内科 松田 尚久）
海外研究医（国籍）	Didik Prasetyo（インドネシア）
研究期間	2025年11月4日～2025年11月21日
研究テーマ	膵胆道疾患および早期消化管癌の最先端診療の研究

成果報告

Dr. Didik Prasetyo は研修期間中、膵胆道疾患および早期消化管癌に関する診断・治療について研修を行い、消化器領域における幅広い知識と技術の習得に取り組んだ。

特に、インドネシアと日本における膵胆道疾患および消化管疾患の病態や診療体制の違いについて理解を深めるとともに、インドネシアで症例の多い総胆管結石症に着目し、結石除去術や治療困難例に対する治療戦略について学んだ。また、胆管ステントの種類や金属ステントの構造・特徴、適応について理解を深めるとともに、膵管ステント留置術についても知識と技術の習得に努めた。

消化管領域では、早期消化器癌に対する内視鏡診断および治療について研修を行い、多くの知見を得た。さらに、日本のがん検診制度にも高い関心を示し、特に大腸がん検診の運用や検診システムについて学ぶことで、予防医療に対する理解を深めた。

本研修を通じて得られた知識と経験は、インドネシアにおける消化器診療の発展に寄与するとともに、帰国後の臨床・教育・研究活動に活かされることが期待される。

NO. 4

受入施設（申請者） 鹿児島大学大学院（小児外科 村上 雅一）

海外研究医（国籍） Jasmine Bajracharya（ネパール）

研究期間 2025年5月19日～2025年6月7日

研究テーマ

発展途上国への小児内視鏡外科手術導入のための Simulation-based Training (SBT) の開発

成果報告

鹿児島大学小児外科が開発した小児内視鏡外科の疾患特異的シミュレータについて理解を深めるとともに、それらを活用した Simulation-based Training (SBT) の手法を経験・習得した。また、実際の小児内視鏡外科手術を見学し、最新の手術技術や診療体制について学んだ。

研究期間中には、鹿児島大学小児外科が主催した国際小児内視鏡外科学会（IPEG2025）に参加し、ハンズオンコースを通じて SBT の実践的な手法や運営方法について研修を受けた。学会では世界各国の小児内視鏡外科に関する研究成果や最新の手術手技に触れるとともに、国際的な研究者との交流を通じてネットワークを構築した。

その後、ネパールにおける持続可能な SBT の実施に必要な機器を整備するとともに、第 62 回日本小児外科学会学術集会に参加した。International Session での研修に加え、インドをはじめとする近隣諸国の研究者との交流を通じて、今後の国際協力や研究連携の基盤を築くことができた。

本研修で得られた知識・技術および国際的な人的ネットワークは、ネパールにおける SBT の普及と小児内視鏡外科手術の発展に寄与することが期待される。

NO. 5

受入施設（申請者） 獨協医科大学（（内科学（消化器）講座 入澤 篤志））

海外研究医（国籍） 秦 斌（中国）

研究期間 2025年7月1日～2025年9月30日

研究テーマ

Diagnosis and Endoscopic Treatment of Early Gastrointestinal Tumors ; Application of Endoscopic Ultrasound in Upper Gastrointestinal and Biliary-Pancreatic Diseases.

成果報告

早期消化器癌に対する診断・治療に関する研究の一環として、特に早期胃癌を対象とした超音波内視鏡による深達度診断について研修および研究を行った。

研修期間中は、実際の臨床現場において内視鏡診療に参加し、早期胃癌症例に対して細径超音波プローブ（UMP）を用いた深達度診断を実践した。あわせて診断データを収集し、UMPの深達度診断における有用性について検討を行った。

3か月という限られた研究期間であったため、統計学的解析を行うために十分な症例数には至らなかったものの、収集した症例においては概ね95%の精度で深達度診断が可能であり、UMPの有用性が示唆された。

本研究で得られた成果を基に、今後は派遣元である西安交通大学第二附属医院においてさらに症例を集積し、獨協医科大学との共同研究として発展させることで、新たな研究成果の発信につながることを期待される。

NO. 6

受入施設（申請者）	九州大学病院（光学医療診療部 仲田 興平）
海外研究医（国籍）	Cemil Buruk Kulle（トルコ）
研究期間	2025年10月1日～2025年10月31日
研究テーマ	消化管疾患に対する鏡視下手術の適応と手術手技に関する研究

成果報告

消化器外科領域における診療体制や治療方針について研修を行い、日本と自国における医療体制や治療戦略の違いについて理解を深めた。

研修期間中は、早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）の適応や治療方針について学ぶとともに、上部胃癌に対する機能温存手術、十二指腸切除後における後腹膜アプローチなど、消化器外科領域の多様な手術手技を見学した。

また、日本における標準化された治療戦略について理解を深め、特に術後の外科標本からリンパ節を丁寧に摘出・分類する手法など、診療の質向上を支える実践的な取り組みについて学んだ。

さらに、週2回開催される手術カンファレンスに継続して参加し、日本の診療ガイドラインに基づく診断および治療方針について学ぶとともに、自国との相違点や課題について医療スタッフと意見交換を行った。

研修期間中は医師や医療スタッフとの円滑なコミュニケーションを通じて積極的に研修に取り組み、消化器外科診療に関する知識と理解を深めることができた。

本研修で得られた知識と経験は、今後の臨床活動および消化器外科領域の発展に活かされることが期待される。

NO. 7

受入施設（申請者）	九州大学病院（光学医療診療部 仲田 興平）
海外研究医（国籍）	Nguyen Tra My（ベトナム）
研究期間	2025年5月6日～2025年5月30日
研究テーマ	消化管疾患に対する鏡視下手術の適応と手術手技に関する研究

成果報告

消化器外科領域における腹腔鏡手術およびロボット支援手術について研修を行い、消化管疾患に対する手術適応や手術手技について学んだ。研修期間中は週3日程度の手術見学を行い、臍頭十二指腸切除術、肝尾側切除術、肝葉切除術、直腸癌手術など、多岐にわたる術式を経験した。

また、週2回開催される手術カンファレンスに毎回参加し、日本の診療ガイドラインに基づく診断および治療方針について学ぶとともに、自国との違いや課題について医療スタッフと意見交換を行った。

さらに、福岡赤十字病院を訪問し、胃癌に対する腹腔鏡手術を見学するとともに、日本の市中病院における医療体制や診療システムについて理解を深めた。

研修期間中は医師、看護師をはじめとする医療スタッフとの交流を通じて、円滑なコミュニケーションを図りながら研修を進めることができた。

本研修を通じて得られた知識と経験は、今後のベトナムにおける消化器外科診療および鏡視下手術の発展に寄与することが期待される。

NO. 8

受入施設（申請者） 九州大学病院（光学医療診療部 仲田 興平）

海外研究医（国籍） Tran Thi Ngoc Lan（ベトナム）

研究期間 2025年10月1日～2025年10月30日

研究テーマ 消化器内視鏡に関する臨床的研究及びベトナムにおける遠隔教育プログラムの構築

成果報告

消化管疾患に対する内視鏡診断・治療について研修を行い、胃癌・大腸癌をはじめとする症例を通じて、診断から治療までの実際の診療プロセスを学んだ。また、20例を超える症例検討を通じて、詳細な症例解析を経験した。

早期消化管癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）については、実際の手技見学に加え、豚胃を用いたトレーニングにも参加し、実践的な技術の習得に取り組んだ。

さらに、肝胆膵領域における超音波内視鏡検査（EUS）や内視鏡的逆行性胆管膵管造影検査（ERCP）にも参加し、10例を超える症例解析を行うとともに、シミュレーターを用いたトレーニングを通じて知識と技術の向上を図った。

また、内視鏡診療における全体の流れや、特に前処置、多職種間連携、鎮静管理およびリカバリーに関する日本の医療体制について学び、自国との違いについて理解を深めた。

加えて、九州大学病院が実施しているテレカンファレンスやインターネットを活用した遠隔医療教育プログラムについて研修を行い、ベトナムにおける遠隔教育体制の構築および活用に向けた知見を得た。

研修期間中は、医師や看護師をはじめとする医療スタッフと積極的に交流し、円滑なコミュニケーションを図るとともに、内視鏡室を中心とした診療現場への理解を深めた。

本研修を通じて得られた知識と経験は、今後のベトナムにおける内視鏡診療および遠隔医療教育の発展に寄与することが期待される。

NO. 9

受入施設（申請者） 九州大学病院（光学医療診療部 仲田 興平）

海外研究医（国籍） Tristan Paulo Madrigal（フィリピン）

研究期間 2025年11月3日～2025年11月29日

研究テーマ 先進的治療内視鏡の適応と手技およびフィリピンにおける遠隔教育プログラムの研究

成果報告

消化管疾患に対する内視鏡診断・治療について研修を行い、胃癌・大腸癌をはじめとする症例を通じて、診断から治療までの実際の診療プロセスを学んだ。また、20例を超える症例検討を通じて、詳細な症例解析を経験した。

早期消化管癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）については、実際の手技見学に加え、豚胃を用いたトレーニングにも参加し、実践的な技術の習得に取り組んだ。

さらに、肝胆膵領域における超音波内視鏡検査（EUS）や内視鏡的逆行性胆管膵管造影検査（ERCP）にも参加し、10例を超える症例解析を行うとともに、シミュレーターを用いたトレーニングを通じて知識と技術の向上を図った。

また、内視鏡診療における全体の流れや、特に前処置、多職種間連携、鎮静管理およびリカバリーに関する日本の医療体制について学び、自国との違いについて理解を深めた。

加えて、九州大学病院が実施しているテレカンファレンスやインターネットを活用した遠隔医療教育プログラムについても研修を行い、フィリピンにおける遠隔教育のさらなる活用に向けた知見を得た。

研修期間中は、医師や看護師をはじめとする医療スタッフと積極的に交流し、円滑なコミュニケーションを図るとともに、内視鏡室を中心とした診療現場への理解を深めた。

本研修を通じて得られた知識と経験は、今後のフィリピンにおける内視鏡診療および遠隔医療教育の発展に寄与することが期待される。

研究会助成

1. 事業概要

本助成は、内視鏡医学に関する研究会の開催を支援し、研究成果や臨床経験の共有を通じて内視鏡医学の振興、普及および啓発を図るとともに、地域における医療水準の向上に寄与することを目的とする。

対象は、学識経験者の主宰のもと継続的に開催される研究会であり、特にライブデモンストレーションを通じた手技の共有や活発な討議が行われるものを助成対象としている。

2. 助成内容

研究会の開催に必要な費用として、1件あたり30万円を助成する。

3. 成果概要

令和7年度は、8件の研究会に助成を実施した。各研究会では、消化管、胆膵領域等における最新の診断・治療技術や研究成果の共有が行われ、ライブデモンストレーションによる症例供覧をはじめ、専門家による講演や症例検討、活発な討議が実施された。

また、地域内外から多くの医療従事者が参加し、内視鏡診療に関する実践的な知見や治療戦略の共有が図られた。これらの活動を通じて、内視鏡診療における手技の普及および標準化が促進されるとともに、医師・コメディカル等の知識および技術の向上に寄与し、地域医療の質の向上ならびに内視鏡医学の振興、普及および啓発に貢献した。

4. 令和7年度助成実績(8件・2,400千円)

開催日順・敬称略

NO	研究会名	代表者	所属	開催日
1	東京国際内視鏡ライブセミナー	井上 晴洋	昭和医科大学江東豊洲病院 消化器センター	4月12日～13日
2	仙台内視鏡治療ライブセミナー	伊藤 啓	仙台オープン病院 消化管・肝胆膵内科	6月21日
3	国際消化器内視鏡セミナー	工藤 進英	昭和医科大学 国際消化器内視鏡研修センタ	7月19日
4	北海道ESDライブセミナー	近藤 仁	斗南病院 消化器内科	11月29日
5	東京メトロポリタン 国際内視鏡ライブ	糸井 隆夫	東京医科大学 消化器内科	11月23日～24日
6	関西消化器内視鏡ライブセミナー	竹中 完	近畿大学 消化器内科	2月8日
7	和歌山消化器内視鏡ライブ デモンストレーションセミナー	北野 雅之	和歌山県立医科大学 第二内科	3月1日
8	近畿内視鏡治療研究会 ライブセミナー	豊永 高史	神戸大学病院 消化器内科	3月14日

※令和7年度に助成された8件のうち、令和8年6月現在4件の成果報告を掲載しています。

NO. 2 仙台内視鏡治療ライブセミナー

代表世話人 伊藤 啓 先生 (仙台市医療センター仙台オープン病院 消化管・肝胆膵内科)

開催日 2025年6月21日

参加人数 150名 (医師102名、コメディカル5名、企業43名)

開催目的

膵胆道疾患における最新の内視鏡診断・治療関連手技を、最新の学術情報とともに紹介し、実践的かつ学術的な討議を通じて手技の普及と患者利益の向上に寄与することを目的として開催された。

プログラム

【ライブデモンストレーション】

- ・EUS-FNA (膵腫瘍)
- ・胆管結石に対する SpyGlass を用いた治療
- ・ERCP による胆管結石治療
- ・EUS-FNA (自己免疫性膵炎疑い)
- ・Interventional EUS (EUS-HGS)
- ・バルーン内視鏡を用いた胆管結石治療

【講演】

- ・悪性肝門部領域胆管狭窄に対する最適な stenting (向井 強先生)
- ・術後再建腸管に対する ERCP の極意 (島谷昌明先生)・EUS-BD 安全実施マニュアル (原 和生先生)
- ・世界の胆膵内視鏡と日本の現在地 (石渡裕俊先生)・膵肥満に対する EUS-FNA (岩崎栄典先生)
- ・IPMN に対する EUS の役割 (越田真介先生)・胆管結石に対する内視鏡治療 (小川貴央先生)

総括

膵胆道疾患の内視鏡診断および治療に特化したライブセミナーとして開催され、ライブ症例と専門家による講演を通じて最新の知見と技術が共有された。EUS-FNA、ERCP、Interventional EUS などの高度な内視鏡手技について、実際の症例を交えながら診断から治療までの考え方や手技の工夫が紹介され、参加者は臨床現場に直結する知識を深める機会となった。

また、事前に整理された学術資料や講演内容により、手技の実際だけでなく、その背景となるエビデンスや治療戦略についても理解を深めることができた。活発な討議のもと全症例が安全に実施され、参加者からも高い評価を得るなど、膵胆道内視鏡診療の発展と医療水準の向上に寄与する有意義な研究会となった。

NO. 3 国際消化器内視鏡セミナー (Yokohama Live 2025)

代表世話人 工藤 進英 先生 (昭和医科大学国際消化器内視鏡研修センター)

開催日 2025年7月19日

参加人数 186名 (医師・企業・招待141名、技師・看護師39名、学生・研修医6名)

開催目的

ライブ中継による実践的な内視鏡手技の供覧と最新知見の共有を通じて、参加者の技術向上および意見交換を促進することを目的として開催された。

プログラム

- ・内視鏡AIとIEEを使いこなす! (堀田欣一先生)
- ・食道ESDライブデモンストレーション (阿部清一郎先生)
- ・大腸ESDライブデモンストレーション (豊永高史先生)
- ・潰瘍性大腸炎の評価とAI (大塚和朗先生)
- ・大腸診断/EMRライブデモンストレーション (三澤将史先生)
- ・大腸ESDライブデモンストレーション (矢作直久先生、斎藤 豊先生、林 武雅先生)
- ・Standardized Approach to the Assessment of Rectal Polyps Endoscopically (Aryn Haji 先生)
- ・陥凹型大腸早期癌の解明へ ~拡大内視鏡からAI・遺伝子まで~ (工藤進英先生)

総括

国内外の専門家による講演およびライブデモンストレーションを通じて、食道・大腸疾患に対する最新の診断技術や内視鏡治療手技が共有された。内視鏡AIや炎症性腸疾患診療など将来の内視鏡医療を見据えたテーマも取り上げられ、参加者にとって学術的にも実践的にも有意義な研修機会となった。患者の協力のもと安全にライブ症例が実施され、活発な討議を通じて内視鏡医学の発展に寄与する研究会となった。

NO. 4 第12回 北海道 ESD ライブセミナー

代表世話人 近藤 仁 先生 (斗南病院 消化器病センター)

開催日 2025年11月29日

参加人数 137名 (医師104名、コメディカル33名)

開催目的

消化管腫瘍に対するESDに関する最新の知識と技術の習得を目的として開催された。

プログラム

- ・胃がん ESD ライブデモンストレーション (小野裕之先生)
- ・食道がん ESD ライブデモンストレーション (高橋宏明先生)
- ・ESDに関する特別講演 (小野裕之先生)

総括

消化管腫瘍に対するESDをテーマに、国内を代表する専門家によるライブデモンストレーションと講演が実施された。術者の判断や工夫をリアルタイムで学ぶことができる貴重な機会となり、参加者は高度な内視鏡治療技術への理解を深めた。参加者同士の交流や意見交換も活発に行われ、ESD技術の向上と内視鏡医療の発展に寄与する有意義な研究会となった。

NO. 6 関西消化器内視鏡ライブセミナー

代表世話人 竹中 完 先生 (近畿大学消化器内科)

開催日 2026年2月8日

参加人数 491名 (医師415名、コメディカル51名、企業25名)

開催目的

消化管および胆膵疾患における内視鏡診断および治療技術の向上を目的として開催された。

プログラム

- ・ 下部消化管症例 (河野匡志先生)
- ・ 胆膵症例 (吉田晃浩先生)
- ・ 光学治療センターにおける感染対策 (安藤貴子先生、河村明子先生)
- ・ 上部消化管症例 (土肥 統先生)
- ・ 胆膵症例 (土井晋平先生)
- ・ 小腸症例 (米田頼晃先生)
- ・ 胆膵症例 (竹中 完先生)

総括

消化管および胆膵疾患に対する内視鏡診断・治療に関するライブ症例を通じて、実践的な知識と技術の共有が図られた。上部・下部消化管、胆膵、小腸領域にわたる幅広いテーマが取り上げられ、医師のみならずコメディカルも含めた多職種参加者が学ぶ機会となった。手技や介助方法について分かりやすい解説が行われ、若手からベテランまで幅広い医療従事者の研鑽に寄与するとともに、内視鏡診療の質の向上に貢献する研究会となった。

顕 彰

1. 事業概要

本事業は、内視鏡医学の振興、普及及び啓蒙に顕著な功績を挙げた個人またはグループを顕彰し、その知識や経験、理念を広く社会へ発信することにより、内視鏡医学のさらなる発展と医療水準の向上に寄与することを目的とする。

2. 助成内容

顕彰対象者には、その功績を称え、顕彰状および副賞を授与する。

3. 成果概要

令和7年度は、内視鏡診断・治療技術の開発、腹腔鏡・胸腔鏡手術の普及と標準化、専門医育成、ならびに早期癌の診断・治療の発展に顕著な功績を挙げた4名の医師を顕彰した。

受賞者の長年にわたる研究・教育・診療活動は、内視鏡医学の発展のみならず、医療技術の普及や後進の育成を通じて我が国の医療水準向上に大きく貢献している。本顕彰事業は、内視鏡医学の発展を支えてきた先達の功績を顕彰し、その成果や経験を広く共有することで、次世代の研究者・医療従事者の活動を促す役割を担っている。

2月に行われた顕彰・研究助成贈呈式では、受賞者がこれまでの研究・診療活動を振り返り、研究開発への挑戦や技術普及の歩み、後進育成への思いなどを語った。こうした経験や理念を共有することは、若手研究者にとって大きな励みとなり、内視鏡医学のさらなる発展につながることを期待される。

4. 令和7年度受賞者(4件・2,000千円)

五十音順・敬称略

氏名	現職(施設名)	顕彰理由
乾 和郎	医療法人山下病院 名誉院長	膵胆道疾患に対する様々な内視鏡診断および治療の開発と臨床応用に尽力し、国内外への普及に貢献した功績
金子 公一	埼玉医科大学 名誉教授	胸腔鏡手術の我が国での地位確立に寄与し、呼吸器内視鏡の専門医制度の発展に貢献した功績
徳村 弘実	東北労災病院 名誉院長	腹腔鏡下胆嚢・総胆管結石術の普及に貢献し、手術の標準化と患者のQOL向上に貢献した功績
門馬 久美子	公益財団法人 早期胃癌検診協会 理事長	早期食道癌に対する内視鏡診断と内視鏡治療の普及および中・下咽頭癌の早期発見の普及に貢献した功績

山下病院 名誉院長 乾 和郎 先生



この度は、伝統ある内視鏡医学研究振興財団の顕彰をいただき、誠にありがとうございます。
理事長の五十嵐良典先生をはじめ関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

私は、1979年に名古屋大学医学部を卒業後、愛知県安城市にある八千代病院で研修を始めました。当時、名古屋大学第一外科の講師だった二村雄次先生に胃カメラをはじめ、ERCP・EST、PTCD・PTCS、血管造影などを教えていただきました。中でも、膵管口切開術や経皮経肝胆嚢内視鏡（PTCCS）といった世界で初めての手技を一緒に行う機会に恵まれました。PTCCSは当財団の1985年度研究助成を受けております。

1984年、癌研究会付属病院での半年間の研修後、名古屋大学第二内科に入局しました。そこで、2年前にご逝去されました中澤三郎先生が率いる第六研究室（通称6研）に所属し、中澤先生の薫陶を受け、さまざまな内視鏡を用いた診断法や治療法の開発に携わることができました。1989年に中澤先生が藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院（現藤田医科大学ばんだね病院）に教授として赴任されるのを機に、兄弟子である芳野純治先生とご一緒させていただきました。

この間、1991年度に「内視鏡的乳頭部圧測定法による乳頭機能の臨床的検討」、1994年度に「MR内視鏡による消化器癌の診断」、2000年度に「3D-IDUSによる膵胆道癌の3次元画像診断の新しい展開」というテーマで当財団の研究助成を受賞しましたこと、感謝いたしております。MR内視鏡とIDUSは世界中から注目され、海外での学会報告は勿論、招待を受けて講演する機会も多くあり、素晴らしい経験をさせていただきました。内視鏡に関する臨床研究では、名大二内6研グループの関連病院である山下病院、豊橋市民病院、半田市立半田病院、公立陶生病院などの先生方に大変お世話になりました。また、研究開発に多大なる熱意をもって取り組んでいただいたオリンパス関係者の方々にも心から感謝申し上げます。

本日このような名誉ある顕彰をいただけましたことは、中澤先生をはじめ、名大二内6研、藤田医科大学ばんだね病院消化器内科の先生方、さらに開発に関係していただいた方々のおかげと厚く御礼を申し上げます。

最後になりますが、本財団が今後も日本の内視鏡医学の研究発展に寄与していただくことを祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

埼玉医科大学 名誉教授 金子 公一 先生



この度は内視鏡医学研究振興財団の顕彰をいただき身に余る光栄でございます。誠に有難うございます。財団理事長の五十嵐良典先生ならびに関係の皆様には厚く御礼申し上げます。

私は1978年に東北大学を卒業し、都内の三井記念病院で5年間の外科研修をした後、当時新設の埼玉医科大学第一外科に入局し、以降35年間在籍しておりました。三井記念病院では消化器外科を中心に外科手術と共に上部消化管、下部消化管の内視鏡、ERCPなどに取り組みましたが、大学入局後は教授の指示で呼吸器外科を勉強することになりました。当時の大学には呼吸器外科の指導者がいなかったこともあり、入局早々に多くの肺手術を行っていた築地の国立がんセンター病院に勉強に出させてもらいました。その時全国から集まって築地で勉強した先生方は心強い仲間としてその後もずっとお付き合いさせていただいております。

消化器内視鏡から気管支鏡の勉強に代わったわけですが、肺の外科が肺結核外科から肺癌外科に移行し、「呼吸器外科」という言葉もできて新たに呼吸器外科学会も誕生した頃でした。

呼吸器外科に専念し、何とか一人で肺癌手術などのマネジメントができる自信がついてきた1990年代初めになり胸腔鏡手術が登場し、今度は全く新しい手術手技を1から習得しなければならなくなりました。そこで1992年の2月に米国カリフォルニア大学で胸腔鏡手術のトレーニングコースを受講しcertificate(修了証)をいただいて戻り、その4月から胸腔鏡手術を始めました。米国でのトレーニングコースの受講は日本人では最初でしたが、本財団現理事の河野匡先生は当時インストラクターとしてご指導いただき、大変お世話になりました。胸腔鏡手術は気胸の手術に始まり、肺部分切除から肺葉切除へと安全性を第一に次第に適応を広げて参りました。

一方、気管支鏡も観察、生検のみでなく治療手段としても活用してきました。当初は気道異物の摘出、気胸や肺癰に対する気管支閉塞やフィブリン糊注入などを行っていましたが、その後ステント留置や光線力学治療(PDT)まで様々な気管支鏡治療に取り組んできました。気管支鏡専門医を認定してきた日本気管支学会は日本呼吸器内視鏡学会と名称変更し、日本医学会の分科会としても認められ、10万例以上の診断的気管支鏡の全国調査も行われています。縁あって日本呼吸器内視鏡学会の理事長を拝命し、気管支鏡専門医の質の確保に努めて参りました。また「気管支鏡テキスト」の改訂も行われました。これらは本財団現評議員の浅野文祐先生を中心にまとめられました。

このように多くの方々に支えられて今日まで取り組んでくることができました。皆様に感謝申し上げますとともに、本財団が内視鏡医学の普及、発展に寄与され、ますます発展されることを祈念いたしまして御礼のご挨拶といたします。本日は有難うございました。

東北労災病院 名誉院長 徳村 弘実 先生



この度は貴財団より栄誉ある顕彰をいただき、誠に光栄に存じます。
財団理事長の五十嵐良典先生をはじめ関係の各位に厚く御礼申し上げます。

私は 1978 年東北大学を卒業。東北大学旧第一外科に入局。1989 年より東北労災病院外科に入職しました。それから今日に至るまでの大部分を腹腔鏡下手術に取り組んでまいりました。

内視鏡外科の黎明期から 30 年以上にわたり、腹腔鏡下胆道手術、腹腔鏡下ヘルニア手術、腹腔鏡下大腸切除術に注力してまいりましたが、中でも国内の普及並びに手術の標準化と患者の QOL 向上に取り組んでまいりました。

また、内視鏡外科治療の可能性拡大を見据え、腹腔鏡下総胆管結石術に必須な軟性胆道鏡の技術開発（臨床評価等）や腹腔内蛍光観察などにも積極的に取り組んでまいりました。患者さんに恩恵の大きい画期的な手術と考へ、ささやかながら情熱を傾けてまいりました。

また、腹部救急医療につきましては、胆石症による急性胆嚢炎・胆管炎の手術成績の向上と診療ガイドラインの論文執筆に携わるなど救急医療における腹腔鏡手術の普及拡大と安全な運用にも取り組んでまいりました。

更に、東北地区における腹腔鏡手術の普及の為、内視鏡外科フォーラムの立ち上げに携わり、現在も名誉理事長として腹腔鏡手術の普及・医師育成に務めております。

現在は、東北労災病院・名誉院長の傍ら、東北労災看護専門学校・学校長も兼任されており、チーム医療に欠かせない看護師育成にも務めています。

僭越ながら、私のこの仕事が今回の顕彰でお認めいただきましたこと、この上ない喜びでございます。今までご指導くださった全国先輩方、同僚の皆様、さらには貴財団、そしてオリンパス株式会社のおかげと深く感謝しております。

また、私は、平成 19 年から選考委員 5 年、平成 24 年から評議員 8 年、通算 13 年もの長きにわたり、当財団の助成事業の発展に携わることができ光栄に思っております。

最後になりますが、本財団の助成事業が今後も日本の内視鏡医学の研究発展に寄与されることを祈念しております。

本日は誠にありがとうございました。

公益財団法人早期胃癌検診協会 理事長 門馬 久美子 先生



この度は、内視鏡医学研究振興財団の顕彰をいただき誠にありがとうございます。理事長の五十嵐良典先生をはじめ関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

私は、1979年に北里大学を卒業後、岡部治弥教授の消化器内科に入局し、5年間の研修後、1984年に大腸疾患勉強のため、田島強先生のおられる都立駒込病院消化器内科に移りました。

門馬が異動1年半後に食道癌の世界で既に有名な吉田操先生が食道外科に赴任され、駒込病院にも早期食道癌の患者が来られるようになりました。初めて食道粘膜癌を検査した時は興奮し、確定診断のため確実に生検しました。術後、吉田先生から「門馬君、病変が二つに分かれてました」と言われました。約4mmと薄い食道壁では、粘膜筋板まで生検することが可能で、生検により病変の形態を変える事がある事を知り、以後、どのような生検が望ましいかを学びました。

その頃、吉田先生から「早期の食道癌は手術でなく、内視鏡治療をする時代です、やりましょう。」と言われましたが、「私は内科医のため、無理です」とお断りしました。しかし、私の結婚の直前、少し余裕がある時に早期食道癌の患者が来院され、私の内視鏡治療の人生が始まりました。オリンパスの協力を得て、把持鉗子の開発、切除手技の工夫などを行い、1991年には「食道粘膜に対する内視鏡治療の開発と食道上皮内癌に対する治療の応用」というテーマではじめて内視鏡財団の研究助成を受賞しました。

病変の発見にヨード染色は有用ですが、ヨード剤で病変が剥け、病変の形が一時的に変化するという問題がありました。しかし、オリンパスが開発中のNBIを使用することで、病変の形態を変えずに早期癌が発見でき、診断出来るようになりました。食道癌は20%が多発で、10%に咽喉頭癌の合併があります。NBIを用いて咽喉頭を診ることで、咽喉頭の早期癌も診断できるようになりました。咽喉頭に関しては、既に研究を進めておられた元川崎市立川崎病院の大森泰先生に学ばせて頂きました。

内科医として初めて食道学会の会長もさせていただき、大変充実した人生を送らせていただきました。内視鏡治療の機会を下さった吉田操先生はじめ食道外科の先生方、共に治療した藤原純子先生をはじめとする消化器内科の先生方、詳細な診断を下さった病理の先生方、そして内視鏡室の看護師さん、学会発表用にいつも綺麗なビデオを制作して下さったオリンパス幡ヶ谷の映像チームの方々、大変お世話になりました。とても良いチームで取り組むことができ深く感謝しています。

今後より多くの先生が同様に良いチームを作ってこのような賞を受賞されることを祈念しています。本日は本当にありがとうございました。

ご支援企業一覧

当財団の事業は、趣旨にご賛同いただいた企業および団体の皆様からのご支援により実施しております。令和7年度にご寄附を賜りました皆様に、心より御礼申し上げます。

株式会社アステム

株式会社アトル

オリンパス株式会社

協和医科器械株式会社

クロスウィルメディカル株式会社

コムテック株式会社

サラヤ株式会社

大和システム運輸株式会社

株式会社中央医療器

ティーエスアルフレッサ株式会社

中日本メディカルリンク株式会社

株式会社広川製作所

株式会社ファースト

宮野医療器株式会社

株式会社三輪器械

株式会社八神製作所

山下医科器械株式会社

株式会社やよい

五十音順・敬称略

令和7年度 助成事業報告

発行日：令和8年6月10日

発行：公益財団法人 オリンパス医学振興財団

〒151-0053

東京都渋谷区代々木2丁目16番7号 山葉ビル

TEL・FAX：03-3375-3531

E-mail：endo-jfe@endo-jfe.or.jp

URL：<https://www.endo-jfe.or.jp/>



※本冊子に掲載している成果報告は、提出された報告内容をもとに、体裁の統一や誤字の修正等、内容を変更しない範囲で編集を行っております。